

重点目標	評価項目	コメント	評価	委員会 評価
◎子ども理解（幼児の見方、考え方、感じ方、気づき、関わり方）を深め、遊び環境を整える。	・記録を振り返り、そこから読み取ったことを学年で共有し話し合うことで、子どもをより深く理解できるように努める。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2学期後半から、友だちと一緒に過ごすことを楽しいと感じながら遊ぶ姿が多くみられるようになった。数日間継続している遊びについて1枚の用紙に記録してみると、遊び方や友だち関係の変化が読み取りやすい記録となり、変化した理由、子どもの気持ちや思いをもっと知りたいという教師の思いがより強くなった。3学期の環境として、教師はすぐに声をかけず、子どもの姿から教師のかかわりが必要か否か、どのようにかかわれば良いか等を考えながら見守ることを意識するようにした。子ども達自ら遊びを見つける力もついてきたように思う。(年少)B</li> <li>・子どもたちが3学期になって自分たちで遊びを進めようとする姿が見られてきた為、教師は遊びに入り過ぎず、客観的に子ども同士の関係性、何を楽しんでいるのか、どんな力が育っているのか、どんなところにつまずいているのか等記録や学年会の中で考えてみるようにした。遊びのイメージが膨らむような素材の準備、遊びの拠点の配置、困っていきそうなタイミングで声をかける等、子どもの姿に合わせたかかわりを意識できるようになったと思う。(年中)B</li> <li>・その日毎や、数日間の様子を追って記録をしていくことで、遊びの様子や学ぼうとしていること、育ちつつあること等を捉えやすくなり、子ども理解を深めることに生かすことができた。ただし、記録に要する時間を優先的に確保し、より子どもの話を深めていくためには、他の仕事をより効率良く進めることや内容の精査が必要と判断。また何よりも教師自身がより保育を学びたいと意欲をもつことができると良い。(年長)B</li> </ul>	B	A
	・遊びを中心とした保育記録から、子どもの興味を読み取り次の日の環境を整える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ごっこ遊びを楽しむ中で、友だちと同じものを身に付けて、同じ動きをしたいという子どもの思いが見られたので、自分たちで好きな材料を選んで遊びに必要なものを作るよう、素材となるものの種類、大きさ、色合い、量など、子どもの遊びや技術を考えながら製作棚に出していくことを意識した。自分の好みの材料を使い、こだわりを持って作ろうとする子が増えたように思う。(年少)B</li> <li>・3学期遊びが継続して展開されていくことが増え、記録も遊びの拠点ごとに書き足していくことが多かった。記録をもとに楽しんでいること、経験していることの変化を教師が読み取った上で、遊んだ後の片付けの仕方に注目し、子どもたちと話し合いながら目で見てわかりやすいように分類したり、きれいに整えたりと丁寧な片付けをするようにした。子ども自身も遊びの振り返りとなり、次の日もその思いのまま遊び出せる環境になっていたように思う。(年中)A</li> <li>・今子どもたちが求めていることや、実態から予想される遊びの方向性を捉えていくことに役立てることができた。自分たちで遊びを進めていく姿が多くなったことで、より物的な環境の構成には悩むことが多かったが、子どもの育ちと構成する環境とのバランスが難しく課題も残った。(年長)B</li> </ul>	B	A
◎生活に必要な行動に見通しをもち、子ども自身が丁寧な生活を意識していくことができる環境について考える。	・子どもが分かりやすく、気持ちよく生活できる環境や時間配分について考えていく。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お部屋の中が騒々しく、慌ただしい雰囲気でも過ごしてしまうことが課題となっていたため、子どもが満足いくまで遊べる時間の保証、それぞれが安心してやりたいことを楽しめる場の構成について教師が意識し、子どもの姿にあわせながら保育をするように心がけた。静かな雰囲気の中では、まわりの友だちの動きも目に入りやすく、声も聞こえやすくなり、心地よく安心できる空間になってきたように思う。(年少)B</li> <li>・教師から指示を受けて行動するのではなく、時間や次の活動を子どもたちと相談して進めていく姿勢を大切にしてきたことで、子ども達も時間の感覚が少しずつつかめるようになり、適切な時間の設定が考えられるようになっていく。(年中)A</li> <li>・「気持ちよく」は子どもの主体的な思いや、思いから引き出される言動を膨らませていくものではないかと考えた。これまで身につけてきた力をさらに伸ばし、後に自分で生活を作り出していく育ちにつなげていくための援助を考え実践していくことを学んだ。(年長)A</li> </ul>	A	A
	・見通しをもった行動(生活)とは、子どものどのような姿なのか、実践から考えていく。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活の中で必要なことがわかり、一人ひとりのペースを大切にしながら、自分のこととして取り組めるようにしてきたことで、一人でできることも増えてきている。生活する力を身につけることが、見通しをもった生活のペースになるのではないかと思う。(年少)B</li> <li>・個々のペースにばらつきはあったが、集団の楽しさや学級で過ごすことの心地よさを知り、クラス全体の動きを意識しながら自行動するようになった。これは、年長組にもつながっていく姿だと思う。(年中)A</li> <li>・状況に応じて自分や自分たちに必要なことを考え、判断し行動する。そこには、先の行動への期待が含まれていることが望ましいのではないかと考えることができた。ただし、教師自身は見通しを意識したかかわりのつもりでも、子どもにとって規制的な感覚になってしまうこともあるのではないかと課題も残った。(年長)B</li> </ul>	B	A
◎公開保育を通して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について理解を深める。	・「遊びの中の学びを探る」ー5歳児の育ちを「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手がかりに考えるーをテーマに公開保育を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本園の子ども達の育ちとして全ての遊びのペースに友だち関係がある。日頃の先生方の子どもに対しての応答の仕方、子どもへの共感性がじわじわとしみ込んでいき、5歳10月となり、お互いがお互いを認め合う姿が全てのペースになってきている。5歳児になると、みんなに認めてもらえる、みんなにすごいと思われることが、一人ひとりの自尊感情や自己肯定感につながっていく。(講演より)集団としての育ちが個の育ちにつながることを学んだ。</li> <li>・本園の研究の中では、「遊びの中の学び」を子どもが主体的に環境にかかわり、心を動かして思いをもつ姿と捉えている。「心を動かして思いをもつ」ということは、子どもの内面のことなので読み取ることが難しく、行動の変容でしか心の動きは読み取れない。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で育ちを考えるだけでなく、それまでの過程、変容を丁寧に捉えていく大切さについても学ぶ事ができた。</li> <li>・子どもたちが遊びや生活の中で経験していることが、過去のどのような経験とつながっているのか、またその後のどのような姿につながるのか…を意識して考えるようになった。今後はそこで気づいたこと、見えてきたことを職員で共有しながら、子どもの育ちを考えていくようにしたい。</li> </ul>	A	A
◎長時間園で過ごす子どもたちが、楽しく、安定した情緒で過ごすためのチーム保育や保護者との連携について考えていく。(保育部)	・パート教諭を含めた教職員が子どものことを共通理解していくために連絡ノートを活用していく。(なかよし)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度は連絡ノートの活用を試みたが、担当職員が時間内で書いたり、読んだりする時間の確保が難しく、継続することができなかった。今回の取り組みを通して、チームで保育をする上で子どものことを共通理解することの大切さを改めて感じる機会となった。担当者はそれをより意識し、現行の日誌の活用や引き継ぎで知らせること、保育部の打ち合わせ会の活用など丁寧に行っていくことで、より子ども理解を深めていきたいと思う。</li> </ul>	B	B
	・エピソード記録を掲示し、保護者に子どもの園での様子が伝わるようにしていく。(とことこ)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「今日はこんなことしたの？楽しそう。」「うん、〇〇して楽しかった。」等、お迎えの時に親子での会話が聞かれ、コミュニケーションのきっかけになっていたように思う。</li> <li>・自我が芽生え、自己主張する姿やイヤイヤが多くなるこの時期に苦労している保護者も多く、エピソード記録を見ることで「園ではこんなこともできているんですね。」と安心していただくことができた。</li> <li>・保護者に園生活の様子をわかってもらい、安心していただく事は、子どもの姿にも影響してくると思う。写真付きでエピソード記録を掲示したが、もう少し深く子どもの姿を考察することを心がければ、より深い子どもの読みとりにつながったと思う。</li> </ul>	B	B

評価(A…十分に成果があった B…成果があった C…少し成果があった D…成果がなかった)

学校関係者評価委員会の評価	<p>◎子ども理解（幼児の見方、考え方、感じ方、気づき、関わり方）を深め、遊び環境を整える。関係者評価 A（2項目とも） 課題としてあげられている「効率よく仕事を進めること、内容の精査」「育ちと構成する環境のバランスの難しさ」について、取り組みによって新たに得られた課題という考え方であれば「成果」であって「A」が妥当と考える。</p> <p>◎生活に必要な行動に見通しを持ち、子供自身が丁寧な生活を意識していくことができる環境について考える。 関係者評価 A（2項目とも） 理由は前評価理由と同様 付帯事項として、幼児教育の内容について、誰にでもわかるような説明努力を引き続きおこなっていくことが求められた。</p> <p>◎公開保育を通して「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について理解を深める。関係者評価 A コロナ禍にありながらも、研修姿勢を外部に開く公開保育研究会は、非常に価値の高いものである。また、継続研究の一つの成果をまとめ上げる位置付けについても、研修への取り組みが難しい業界において「質の向上」に取り組むロールモデルとなり得ている。引き続き、そのポジションを守り続けてほしい。</p> <p>◎長時間保育で過ごす子どもたちが、楽しく、安定した情緒で過ごすためのチーム保育は保護者との連携について考えていく。 関係者評価 B（2項目とも） 時間の工夫、職員間の共通理解の難しさ等が課題として挙げられており、評価としての妥当性が認められたため。</p>
---------------	--